

「ヴァーチャル・コミュニティ」再考

吉田 純

一 はじめに

マスメディアでのひところの「IT革命」言説の隆盛や「ITバブル崩壊」後のその沈静化とは別のところで、日常の生活世界へのインターネットの浸透は、ここ数年でさらに急速に進展したように思われる。こうした状況を受けて、従来の情報社会学やメディア論とは文脈を異にする社会(科)学的諸領域——たとえば宗教、医療、福祉、政治、社会運動など——からも、いわば領域を横断するかたちで情報ネットワーク社会をめぐる諸問題へのアプローチがなされるようになってきた。そうした動向の中で、筆者もいくつかの学会、研究会、ワークショップなどに、司会、ゲストスピーカー、あるいはコメンテーターなどの役割で関わる機会を得たが、それらの場でしばしば痛感したのは、いわゆる一般理論も含めて、既存の諸領域の内部のみにとどまっていた問題は、アプローチ自体がもはや困難になりつつあるということである。情報ネットワークの発達・浸透は、既存の社会諸関係の流動化・組み替えというかたちで進行しつつあり、それと

もに、既存の社会諸関係を対象として構築されてきた諸領域の有効射程を超えて、対象のほうが広がりつつあるというべきだろう。ただしそれは、社会学がこれまで開発・利用してきた理論や概念が有効性を喪失するということでは必ずしもない。むしろ情報ネットワーク社会の形成は、そうした理論や概念を有効に再構築しうるかどうかの試金石を提供していると積極的に考えるべきではないだろうか^①。

そうした意味で筆者個人がとりわけ最近、再検討・再構築の必要を感じている概念のひとつとして、コミュニティ(およびその関連概念としての共同性、親密圏)の概念がある。周知のように「ヴァーチャル・コミュニティ」は、情報ネットワーク社会をめぐる多くの言説の中でしばしばキーワード的な役割を演じてきた。しかしこれまでのところ筆者はこの概念の積極的な使用をためらってきた。拙著『インターネット空間の社会学』ではその理由について単純に、『コミュニティ』という言葉からくる多義性やバイアスを避けるため」と述べた(吉田 二〇〇〇: 五二)。その背景には、ハーバードの社会学理論を粹組とし、インターネット空間を基盤とした公共圏の構築の可能性を規範論的に追求するという拙著の基本的アプローチにとって、コミュニティ概念が適当な位置を占めにくかったという事情もある。しかしその「多義性やバイアス」の内容こそを——とりわけそこに内在しているアンビヴァレンスを——再考し、コミュニティ概念の再構築へと

つなげていく必要性を、最近になって改めて感じるようになってきたのである。

もとよりこの小論では、この課題に本格的に取り組むことはとてできない。ここではコミュニケーション概念を意識せざるをえなくなった二三のきっかけについて、いわば理論的作業の初期段階の中間報告として述べてみることにしたい。

二 宗教的共同性のアンビヴァレンス

そのきっかけのひとつは、二〇〇一年三月に開かれた「宗教と社会」学会「インターネットと宗教」プロジェクト研究会「インターネットがもたらす宗教的共同性への求心力と遠心力」にゲストスピーカーとして参加した経験である^③。

この研究会では最初に拙著への書評セッション（黒崎浩行氏による書評と筆者からのリプライ）が設定され、社会空間としてのインターネットがもつアンビヴァレントな志向性（公共圏の理念への接近と離反）を確認した上で、これをいわゆる理論的叩き台として、研究会のテーマである「宗教的共同性への求心力と遠心力」に関する具体的事例研究へとつなげていくという構成がとられた。「求心力」の事例としては、ある僧侶が運営している対話型ウェブ 사이트が新たな宗教的「救い」の可能性を示しているとする報告が、また「遠心力」の事例としては、ある教団からの脱会を促進する際にインターネットを通じた情報が重要な役割を果たしているという

報告がなされた。

しかし筆者自身は正直なところ、書評へのリプライや全体討論の中で研究会のテーマに実質的に貢献しうるような発言をすることがあまりできなかった。それはひとつには、宗教の領域が筆者にとってこれまでまったく研究関心の射程外にあったという単なる不勉強によるものであるが、それに加えて、現在の時点から反省的に考えれば、筆者の中にもその場では容易に解決しがたい混乱が存在したからでもあった。その混乱とは、公共圏への接近と離反という対抗的ヴェクトルと、宗教的共同性への求心力と遠心力というやはり対抗的なヴェクトルとをどう重ね合わせればよいか、という問題に関するものであった。

例えば仮に宗教的共同性を単純に非合理的なものとし、合理的コミュニケーションによる問題解決へのヴェクトルに反するものと措定すれば、宗教的共同性への求心力は公共圏からの離反と、宗教的共同性からの遠心力は公共圏への接近と、それぞれ同一方向に重ね合わされることになる。しかし言うまでもなく問題はそれほど単純ではない。先述の僧侶のウェブ 사이트は、既成の仏教が対応しきれいていない信者のニーズへの対応（「悩み」への「救い」）を僧侶とのコミュニケーションによって可能にする場として、つまり一定の問題解決へのアプローチを含む場として提示されていた。他方では、教団からの脱会を促すインターネット上の情報が、すべて合

理的な根拠に基づく説得であると考えるのも単純に過ぎよう。二組の対抗的ヴェクトルは、(プラスマイナスいずれの方向にも)単純に重ね合わせるができないのである。言い替えれば、二組の対抗的ヴェクトルは、互いが互いに対してアンビヴァレンスを含んでいる。

インターネットと公共圏をめぐる問題領域からは遠いものとしてそれまで意識化することのなかった宗教的共同性というテーマをきっかけに、そうした二重のアンビヴァレンスに気づかされたという意味で、この研究会は筆者にとってひとつの貴重な経験となった。

三 パソコン通信コミュニティの「敷居の高さ」

コミュニティ概念を意識せざるをえなくなったもうひとつのきっかけは、筆者の私生活での経験に属するものである。一九九〇年頃から筆者が積極的に参加してきたパソコン通信ネットワークのひとつに、歌手・中島みゆきのファンのあいだのコミュニケーションを目的として運営されてきた「歌暦(うたごよみ)ネット」があった。一九九八年、多くのパソコン通信ネットワークが閉鎖され利用者がインターネットへと移行していく状況を受け、歌暦ネットも従来のパソコン通信(ローカルなネットワーク)の形態から、インターネットと融合・接続した形態へと、運営形態を根本的に見直そうという提案が管理者からなされた。

この提案に対し、インターネットへの移行自体については筆者も含めほとんどの利用者が賛成をした。議論になったのは、インターネットに移行する場合どのようなシステムを採用すべきかという点に関するものである。考えられる実質的な選択枝は、(a) telnet 接続による従来同様の BBS (電子掲示板システム)、(b) ウェブ BBS、(c) メーリングリスト、の三つであった。

管理者は当初ウェブ BBS を積極的に検討する意向を示したが、メンバーの一人 E.Z 氏から次のような反対意見が出された。

「最大の問題は参加者の敷居が低くなりすぎることでしょう。ある程度のリテラシーがないと参加できないほうが望ましいと私は考えます。」「いわゆるパソコン通信のようなトラッドなシステムだと、いわゆるインターネット世代にはかなり敷居が高いでしょう。しかし、その分、『どうしても読む/書く』という意識を持った人しか来ないこととなります。結果、それなりに書き込みの質をあげることができるわけです。むやみやたらと敷居を下げるのは反対です。」

この発言の意図は、次のように解釈することができる。すなわち、従来のパソコン通信はウェブ(ホームページ)に代

表されるインターネットのアプリケーションに比べて、利用するための技術的難易度（敷居）が高い。しかしそれゆえに、コミュニケーションに参加したいという明確な意志をもったメンバーだけが参加することになり、情報の質やコミュニティとしての信頼性を高水準に保つことができる、ということである。

筆者自身も歌暦ネットのメンバーの一人として、EZ氏に近い立場から、次のような発言をした。

「まず前提として、BBSというものの本質的機能を損なわないことが必要だと思います。インターネットの他のアプリケーションと異なるBBSの本質的機能は、①一定のメンバーシップを共有する者どうしのコミュニケーションの場である、②複数のテーマについての話題を同時に混然なく進行させることができる、という二点を同時に満たすことにあります。メーリングリストは①の条件は満たしますが、②は満たしません。……ウェブBBSは②の条件を満たしますが、EZ氏も書いているとおり『敷居が低すぎる』ため、今度は条件①を満たさなくなる恐れがあります。メンバーシップには、ある程度のリテラシーが前提になるでしょう。」

筆者がここで「メンバーシップの共有」とともに「複数の

話題の同時進行」をBBSの本質的機能の一環として強調したのは、歌暦ネットが「中島みゆきファンのコミュニケーションの場」を第一義としつつも、中島みゆきとは直接関係がなく、かつかなり趣味的あるいは専門的な話題を進めることも可能な場であったことを評価していたからである。この目的のために、メンバー各自が自由に選択したテーマで掲示板を開設できる機能も存在した（ちなみに筆者自身はクラシック音楽の掲示板を開設しており、他には医療、小説、映画、哲学・宗教などの掲示板も存在した）。そうした自由なテーマ設定の可能性によって、歌暦ネットは単なる中島みゆきファンの情報交換の場ではなく、多様な関心に基づくコミュニケーションを許容するコミュニティとして機能してきたと筆者は考えたのである。

こうした議論はあったものの、従来のBBSをベースとする伝統的な形態にとらわれては新しいメンバーがついてこられるかどうか不安だという管理者の意見などから、歌暦ネット自体は結局メーリングリスト（ただしウェブでもアクセス可能なシステム）に移行した。しかしEZ氏や筆者を含む何人かのメンバーは、メンバーの一人が新たに開設したBBS（Telnet接続を基本とし、ウェブによるアクセスも可能）を主なコミュニケーションの場とすることになった。

この議論の本質は、「コミュニティ」という言葉こそ表面には出なかつたものの、現在の情報ネットワーク社会の風景

からは過去に退いてしまったパソコン通信というメディアが可能にしていた独自のコミュニティのあり方をどう評価するかという点にかかわるものであったといえる。とくに「数居の高さ」(メンバースhipの限定)はアンビヴァレントな特性であり、E Z氏や筆者が主張したようにコミュニティの信頼性を高める一方で、管理者が主張したように新たなメンバークの参入を阻み、ひいてはコミュニティの排他性を強める要因ともなりえただろう。

四 コミュニティのアンビヴァレンス

このアンビヴァレンスは、筆者が私的に経験したひとつの特殊ケースに見出されたものではあるが、同時にコミュニティ概念そのものがはらむアンビヴァレンスを示唆しているようにも思われる。この点についてももう少し考えてみるために最後に「ヴァーチャル・コミュニティ」概念をめぐる言説の布置について検討しておきたい。

情報ネットワーク社会をめぐるジャーナリスティックな言説やCMC (Computer Mediated Communication) 研究の言説においては、これまでコミュニティ概念はもっぱらポジティブな規範の意味を与えられてきたといえる。ジャーナリスティックな議論は、しばしば「インターネットは新たな私たちの素晴らしいコミュニティを創り出すのか、それともコミュニティ全体を破壊するのか」という図式をとってきた

(Wellman and Gulia 1999: 167)。またCMC研究は、初期(一九八〇年代)のそれが「社会的手がかりの欠如」からくる「非人格的なコミュニケーション」を強調したのに対し、一九九〇年代に入ると、「使用者の創造性」が「新たなコミュニティ」の形成を可能にするというポジティブな評価への転換がなされた(土橋 一九九九: 一一四—一六)。いずれにせよ、こうした議論に共通する自明の前提として、「コミュニティ」自体の内実はほとんど問われることなくポジティブに位置づけられてきたといえる。

しかしながら最近になって、とくに社会学者のあいたから、ヴァーチャル・コミュニティのネガティブな含意を指摘ないし強調する言説が語られるようになったことは興味深い。たとえば大澤真幸は、インターネットが支える「遠隔地ナショナルリズム」に典型的にみられるように、電子メディアは「分散的で排他的な共同性」へと社会を導き、「自分自身が単なるローカルなネットワークのなかの一員であるという感覚しか持たなくなってくる」状況をもたらすと述べる(大澤 一九九九: 五四、八六)。

またウェルマンとグリアも次のように述べている。「関心の共有にもとづくコミュニティは、もうひとつのかたちの同質性を促進するかもしれない。メディアには多様な文化や理念を結びつける潜在力があるにもかかわらず、人々は一般に同じ関心や興味を共有する他者と自らとを結びつけるような

電子的グループにひきこまれつつあるのではないだろうか。」

(Welman and Gutia 1999: 185)

こうしたネガティブな含意と、これまでヴァーチャル・コミュニティに与えられてきたポジティブな含意との関係を、どのように理解すればいいのだろうか。この問題を考えるうえでひとつのヒントになるのが、安川一・杉山あかしがNIFTY-Seveのあるフォーラムの運営をめぐる論争を理解するための枠組として設定した、「システム圧力」「コミュニティ圧力」「コミュニティケーション圧力」という「三つのモーメント」の関係である。

「システム圧力」とは、ヴァーチャル・コミュニティ外部の経済関係や権力関係からくる圧力であり、「社会状況自体を課題として議論を深化していくことを阻害する」。「コミュニティ圧力」とは、ヴァーチャル・コミュニティに「コミュニティケーション欲求の充足」を目的として参加し「社交の場として機能すること」を求める圧力である。そして「コミュニティケーション圧力」とは、「単なる仲間作りよりは、議論している内容についての問いかけ・答え」「議論内容についての検討の掘り下げ」を求め、「対話的理性へと開かれたコミュニティケーションの場」を生成しようとする圧力である。「この三つのモーメントは、整合的に働く場合もあれば、対立的に働く場合もある」(安川・杉山 一九九九:二〇四)。

安川・杉山が取り上げた論争の事例では、「コミュニティ

圧力」と「コミュニティケーション圧力」とは対立的に働いていたとされる。そこではまさに大澤のいう「分散的で排他的な共同性」への圧力が「コミュニティケーション圧力」と対抗していたともいえる。しかしながらそれとは逆に、両者が「整合的に働く」場合——つまり、「社交の場」としてのコミュニティが、理性的コミュニティケーションの基盤として機能する場——も容易に想定することができる(筆者がかつて歌麿ネットを含むパソコン通信BBSに期待値をこめて見だしていたのも、まさにそうした可能性であったといえる)。

「システム圧力」「コミュニティケーション圧力」という他の二つの「モーメント」との相互関係の中に「コミュニティ圧力」を位置づけるといふ視点は、小論で述べてきたようなコミュニティ(ないし共同性)概念がはらむアンビヴァレンスを理解するうえで、ひとつの可能性を示唆しているように思われる。それはアンビヴァレンスをコミュニティ自体に内在するものとみなすのではなく、コミュニティをいわばシステムやコミュニティケーションとの関係概念として再構築することによってとらえなおしていく視点である。それはひいては、「ヴァーチャル・コミュニティ」を単純にポジティブまたはネガティブに意味づけるのではなく、情報ネットワーク社会の布置状況のなかに動的に位置づけながらそのリアリティを捉えていく視点にも結びつきうるのではないだろうか。

注①たとえば、インターネットをめぐってしばしば言及される匿名性の概念についても、本誌前号に掲載された拙著への「書評に込めて」でも述べたように、社会学史におけるその成立経緯を踏まえた上での再構築が必要とされていると思われる（吉田 二〇〇一）。

②この課題は、公共圏の可能性の追求というテーマにとっても重要な意味をもつ。それは端的に言えば、公共圏は親密圏の対概念として、つまり『公共的なもの』は、何を『個人的なもの』『私的なもの』として定義するかによって反照的に定義される」からである（齋藤 二〇〇〇：一二）。この点について詳しくは、稿を改めて論じたい。

③同研究会全体の記録は <http://www.ipe.tsukuba.ac.jp/~s015679/sun/abstract.html> を、拙著の書評セッションの記録は <http://www.ipe.tsukuba.ac.jp/~s015679/sun/kurosaki.html> を参照。

④Jelnet はインターネットの最初期から用いられてきたアプリケーションであり、キーボードからの文字入力と画面への文字出力によってホスト・コンピュータとのやりとりをおこなうものである。従って、従来から文字の入出力によって行われてきたパソコン通信とはほぼ同様のインターネットフェースを実現することができる。

参考文献

土橋臣吾 一九九九「コンピュータ・ネットワークのコミュニケーションション論——CMC研究およびその背後仮説の批判」

判的検討」、『社会情報学研究』第三号、一一三—二六頁
大澤真幸 一九九九「電子メディアの共同体」、吉見俊也・大澤真幸・小森陽一・田嶋淳子・山中速人『メディア空間の変容と多文化社会』、青弓社、四七—九四頁
齋藤純一 二〇〇〇『公共性』、岩波書店

Wellman, Barry and Gulia, Milena 1999, "Virtual communities as communities", in: Kollock, Peter and Smith, Marc A. (eds.), *Communities in Cyberspace*, Routledge: 167-94
安川 一・杉山あかし 一九九九「生活世界の情報化」、児島和人編『講座社会学8 社会情報』、東京大学出版会、七三—一五頁

吉田 純 二〇〇〇『インターネット空間の社会学——情報ネットワーク社会と公共圏』、世界思想社
——— 二〇〇一「書評に込めて」、『ソシオロジ』第四六卷二号：一四八—五二頁

（よしだ じゅん・京都大学総合人間学部助教授）